



# きずな

**No.8**

 平成28年  
3月発行

～福岡県の地域コミュニティ情報誌～

 編集・発行 福岡県企画・地域振興部市町村支援課 〒812-8577 福岡市博多区東公園7-7  
TEL 092(643)3302 FAX 092(643)3078

## 地域と小学校の連携で防災力向上！ ～中間西校区まちづくり協議会(中間市)～

明治日本の産業革命遺産として世界文化遺産に登録された遠賀川水源地ポンプ室がある中間市。中間市では、平成28年度までに市内の6小学校区全てに校区まちづくり協議会を設立することを目指し、市がまちづくり協議会の協力団体となり、専任の地域担当職員を置いて活動をサポートしています。

今回は、市内で最初に設立された「中間西校区まちづくり協議会(平成25年10月設立)」が取り組む防災避難訓練について取材しました。

### ●防災無線放送を合図に避難

中間西小学校区内には6つの自治会があります。平成23年度に全ての自治会で自主防災組織が発足し、それに併せて市の主導で防災避難訓練を実施しました。しかし、まちづくり協議会の発足後は、「災害時に自分たちの地域から被害者を出さないこと」を目標に、協議会が主体となって毎年開催しています。この防災避難訓練は、中間西小学校の土曜日授業の一環として、子どもたちと地域の方が一体となって実施されることが特徴で、約600人の参加があります。

11月21日土曜日、朝9時の防災無線放送を合図に避難訓練が始まります。各自主防災組織は自治会公



自主防災組織ごとに小学校へ

民館から中間西小学校に向けて、整然と避難していきます。今回は、中間東中学校の生徒が初めて参加し、リヤカーや車



中学生が避難行動要支援者と一緒に避難

椅子などを使用して、避難行動要支援者の避難を手助けする訓練も行われました。地域の方の避難に続いて、登校中の子どもたちが校庭に避難しました。

### ●学年ごとの避難訓練

全ての自主防災組織の避難を確認し、開会式を行ったあと、子どもたちは学年ごとに分かれて、地域の方と共に訓練を行います。

## Contents No.8

各地の活動	● 中間西校区まちづくり協議会(中間市).....	1～2
	● 別府一町内会(志免町).....	2～3
コラム	「中高生と語る中から見えるコミュニティの未来」九州大学大学院 統合新領域学府 客員准教授 加留部 貴行 ..	4
	県の施策紹介.....	4

6年生は、AEDの訓練です。消防署職員からAEDの操作について説明を受け、心臓マッサージをする人やAEDを操作する人、消防署に通報する人など、役割を分担し交代しながら訓練を行いました。子どもたちは「頑張れ！」と励まし合いながら、真剣に取り組んでいました。

5年生は、初期消火訓練と煙ハウス体験です。消火器の使い方では、「ピ・ノ・キ・オ」の手順(ピンを抜く・ノズルを取る・気合を入れる・レバーを押す)で、実際に水消火器を使用して初期消火を体験しました。

1～4年生は、体育館で各自治会の避難場所づくりです。子どもたちが中心となって、段ボールを開き、組み合わせを考えて作成します。避難場所のつくり方は自治会ごとに独自性が見られ、避難場所内に仕切りがあったり、円形をしていたり、机や椅子、靴箱、ゴミ箱も作成したりするなど、様々な工夫の跡が見てとれます。友だちや地域の方と協力して、楽しそうに避難場所づくりに取り組んでいました。協議会の方に話を伺うと、この避難場所も年々つくり方が良くなっているようで、今回は前回よりも周囲の仕切

りがしっかりできたと感心されていました。

閉会式のあとは、地域の方が準備された心温まる炊き出しを自治会ごとに避難場所で食べ、防災避難訓練終了です。

### ●反省を次回に活かす

回を重ねることで少しずつ100点に近づけていきたいとの思いから、訓練を実施したあとには必ず反省会を行い、次の訓練に活かすようにしています。岡山会長をはじめ協議会の方々は、日頃から地域の子もたちが大人との関わりやふれあいを持つことで、将来、地域の担い手になってほしいと願っています。

### ●まちづくり協議会事務局は余裕教室に

中間西校区まちづくり協議会の事務局は、中間西小学校の余裕教室を活用しています。小学校と合同で行われている防災避難訓練からも分かるように、事務局が小学校内にあることで学校との連携がとりやすく、活動の幅が広がりを見せています。今後も、学校と連携した新たな取組が期待されます。



役割を分担したAED訓練



消火器はしっかり火元をねらって！



みんなで協力して避難場所づくり

## 家庭学習の応援で子どもの学力向上！ ～別府一町内会(志免町)～

糟屋郡志免町は、県の西部、福岡都市圏のほぼ中心に位置し、福岡市に隣接するベッドタウンとして発展した町です。町内にある30の自治会(町内会)は地域の特性に合わせて、様々な地域コミュニティ活動に取り組んでいます。

今回は、町内4つの小学校で最も児童数が多い志免西小学校区にある別府一町内会が取り組む、小学生を対象とした学習支援室「別府一パワーアップスクール」を紹介します。

### ●地域で家庭学習を支援

別府一パワーアップスクールは、3～5月を除く毎月3回、土曜日の午前中に別府一公民館で開講しています。学習科目は、国語、算数、英語の3科目で、1・2年生、3・4年生、5・6年生の3クラスに分かれて学習します。地域の高齢者が中心となって、宿題の手伝いや学校の勉強で少し分からないところの見直しなど、家庭で学習を見る時間がなかなか取れない保護者に代わって家庭学習の手伝いを行っています。



スクールの目的は、勉強の楽しさを知り、学習習慣を身につけること、努力することの大切さを知ること。さらには、共助や思いやりなどの徳性を養うことも目的の1つとして取り組んでいます。

## ●土曜日の午前中は公民館へ集合



続々と受付に集まる子どもたち

公民館にやって来た子どもたちは、玄関で靴を並べて中へ入り、地域の方と「おはよう」と元気に挨拶を交わします。出席確認をして、貯金箱にプリント代の100円を入れ、学年ごとに用意された長机に座ります。

まずは、英語学習の時間です。英語は、元教員や外国人など3人の講師が担当しています。英語の音楽や遊びを取り入れたり、英会話の練習をしたり、子どもたちは講師と共に楽しく英語の学習をしています。問題に取り組む子どもたちは、講師からマルをつけてもらい笑顔、難しい問題のときヒントをもらって

英語学習の様子(1・2年生)



正解が分かるとさらに笑顔。とても嬉しそうです。

英語の学習には、子どもの頃から外国人と接する機会を作ること、英語に親しむ下地を作り、英語の楽しさや面白さを感じてもらいたいという地域の方の思いが込められています。



英語学習の様子(3・4年生)



同じ目線で優しく教える地域の方々

英語学習のあとは、国語や算数の自習時間を設けています。子どもの質問に対して、講師である地域の方は目線を合わせ、分かりやすく個別に指導されています。時には子ども同士で分からないところを教え合う姿も見られました。

## ●保護者の要望に応えて

この取組のきっかけは、地域の方を対象に実施したアンケートからでした。子どものいる家庭のほとんどが学習支援を望んでいることが分かり、地域で家庭学習の支援を行うことにしたそうです。「別府一パワーアップスクール」という名称は保護者の意見から決め、平成26年8月にスタート。働く保護者が休息を取れるようにと土曜日の午前中に開講するようにはしましたが、保護者も自主的に集まるようになり、毎回、子どもたちの昼食を用意して参加しています。友だちと楽しく学習したあとの昼食の時間が、子どもたちにとって一番の楽しみにもなっています。

別府一町内会は子育て世代の転入者が多い地域ですが、学習支援を通じて保護者間の交流が深まり、ほかの地域行事への参加も増えているそうです。

## ●別府一パワーアップスクールのこれから

1年目は20～30人であった参加者が、今では、毎回50人ほどに増えています。スクールは質問しやすい和やかな雰囲気、子どもからも大人からも多くの笑顔があふれていました。子どもの学力向上を目標とした取組ですが、子どもたちだけでなく、講師や地域の方にとっては子どもたちとのふれあいが生きがいとなり、元気の源になっているそうです。

現在、中学生を対象とした学習支援も検討されています。取材の最後には、「同じような取組を町内全域へ広めたい！」と、渡辺町内会長から熱い思いを伺うことができました。



## 「中高生と語る中から見えるコミュニティの未来」

九州大学大学院 統合新領域学府 客員准教授 <sup>か る べ たかゆき</sup> 加留部 貴行

最近、中高生から学ぶ機会が増えています。平成28年2月21日(日)に長崎県平戸市の市制施行10周年記念事業「平戸まちづくり大会」にパネルディスカッションのコーディネーターとして招かれた際も、前半のまちづくり事例発表の中の度島中学校1・2年生のみなさんからのメッセージは大人たちの心に強く響くものとなりました。

平戸本島からフェリーで40分ほどの人口780人あまりの離島・度島で約1年かけて取り組まれた「度島まちづくり塾」。中学生がフィールドワークを通じて地元をじっくりと知り、25年後の島の姿を自らが描き、具体的なアクションを提案します。その活動発表の寸劇中に「25年後にここに住んでいるイメージしか湧かない」という台詞がありました。

離島という環境はあるにせよ、このような言葉を出せるくらいに私たち大人は「自分のまちに自分が将来住んでいるイメージ」を中高生に持たせているでしょうか。大人たちが勝手に諦めて、既に放棄しているのではないか、逆に足を引っ張り合う姿を見せつけて「二度とここに戻ってくるものか」と思わせることをやってはいないか。大人が何をなすべきかを問いかけるに、この台詞は余りあるものでした。さらに、パネリストの度島中の生徒に、大人に何を学んで欲しいかを尋ねると、「外から人が来た時に地元を案内できるくらい地元のことを知っておいて欲しい」と返され、もう反省しきりの大人たちでした。

昨今、全国の自治体で地方創生などのプランを作る際に中高生をメンバーに加える事例が増えてきています。ともすれば、大人の5年後・10年後へ

### (著者プロフィール)

1967年福岡県出身。九州大学法学部卒業後、西部ガス㈱入社。2001年に福岡市へNPO・ボランティア支援推進専門員として2年半派遣。07年から九州大学へ出向し、ファシリテーション導入を通じた教育プログラム開発などを担当。企業、大学、行政、NPOの4つのセクターを経験した「ひとり産学官民連携」を活かした共働ファシリテーションを実践。11年4月に独立。現在は、加留部貴行事務所AN-BAI代表。他に、福岡市研修企画アドバイザーなど。著書に『チーム・ビルディング』、『教育研修ファシリテーター』（いずれも共著・日本経済新聞出版社）など。



の発想は今の生活の延長線上にしか視点が定まらないこともあります。地元中高生の5年後・10年後は自分の進路に直結する超リアル感満載な未来。地元にいるこの世代が大人と一緒にまちの未来を語ることは、自分のまちを改めて考え捉え直す良い機会であり、これがきっかけで将来地元に戻ってこようとする気持ちにつながるかもしれません。大人と真摯に語り合う中高生の姿を見て、これまで子ども扱いしすぎたのではないかと反省するところでもありました。

コミュニティの本来の意味は「共に重荷を担い合う」ということ。改めて「話をしていそうで、話をしていない者同士で、話をする」ことを通じて、地元に対する思いを多様に集結させて、心軽やかで小さな明るい活気が大きな深い恵みをまちにもたらすのであれば、次の10年はより多様な人たちの関わりの中からその未来を生み出していくことが鍵になりそうです。



## 県の施策紹介 ～地域における女性の活躍推進モデル事業～

県では、地域の団体が行う女性の活躍を推進する先駆的な取組を支援しています。平成26年度から2年間、地域コミュニティ組織など4団体が、モデル事業として自治会等での女性役員登用に向けてのアンケート調査や啓発活動、ワークショップなどを行いました。

この事業成果をまとめたパンフレットを発行します。女性と男性が共に担っていく地域づくりのヒントが見つかります。

お問合せは、福岡県男女共同参画センター「あすばる」まで(TEL 092-584-1261)